

簿記教育における内発的学習意欲の育成を目指した カリキュラムについての考察

濱 田 峰 子

〈要旨〉

現在、社会の仕組みが大きく変容し、これまでの価値観が見直されつつある中、大学においても主体的に考える力の育成が求められている。そこで、簿記教育における内発的学習意欲の育成を目指したカリキュラムについて考察するため、学生の理解度に関するアンケートを実施し、理解が難しく学習意欲の減退につながっていると考えられる分野を特定した。その結果、身近なものとして実体験している分野では理解度が高く、馴染みのない分野では理解度が低かった。一方、馴染みのない分野であっても授業で重点的に扱うことで理解度が高まることが示された。

次に、各分野の理解度の向上が簿記試験の成績向上に与える影響を定量的に評価するため、回帰分析を実施した。その結果、全経簿記検定3級では、「精算表の問題」、「掛け取引に関する仕訳」、「現金過不足に関する仕訳」、「商品有高帳の問題」、「引出金の整理に関する仕訳」の理解度を、日商簿記検定3級では、「商品売買に関する仕訳」、「当座借越に関する仕訳」の理解度を説明変数とした場合に、回帰係数の推定値が有意に上昇しており、これらの分野の理解をさらに深めることで、成績が大きく向上することが示唆された。また、「簿記の5要素の計算問題」、「財務諸表の問題」、「試算表の問題」等の理解度が低い分野を理解することで、成績向上への寄与が大きいことが示唆された。

以上のことから、簿記教育のカリキュラムとして、記帳手続きの全体像を学習した上で、馴染みが薄く、理解度は低いが、試験成績への寄与が大きい財務諸表や試算表等の分野を重点的に学習し理解を促すことで、成功体験として内発的学習意欲の向上にもつながることが示唆された。

はじめに

2012年8月28日に文部科学省が発表した「新たな未来を築くための大学教育質的転換に向けて～生涯学び続け、主体的に考える力を育成する大学へ」（中央教育審議会答申）の中の「求められる学士課程教育の質的転換」で、社会の仕組みが大きく変容し、これまでの価値観が根本的に見直されつつある昨今、このような状況下を生き、社会に貢献していくには、想定外の事態に遭遇したときに、そこに存在する問題を発見し、それを解決するための道筋を見定める能力が求められるとしている。そのために学生が主体的に問題を発見し、解を見いだしていくことが重要である⁽¹⁾。

本校の初年度前期簿記教育では、個人企業を対象とした商業簿記の基本とその応用を理解することを目標としており、その目標を自ら進んで達成できるように、まず、簿記の記帳手続きの全体像を理解し、次の段階として、各勘定科目の具体的な取引記帳手続きの理解を促している。これにより、学生自身が簿記に対する考え方を深掘りし自主的に考える力、批判的思考力を身につけさせたいと考えている。このような学習方略（スキル）の習得は学習成績向上につながる事が知られている。アカデミック・スキルとしての批判的思考は、大学で多くの事柄を主体的に学ぶために必要なものである。批判的思考スキルは資料に対する批判的な見方を養い、因果関係を考察し、解釈の多様性に気付く。学ぶことの動機付けを振り返り、自分で主体的・批判的に学習をすすめる契機になるものである。自己を理解し、自分の生活や生き方、社会の問題を主体的・批判的に考えるための科学的な材料を提供することになる⁽²⁾。

さらに、ブルナーは「教育の過程」において、内発的な学習意欲こそ子供の学習活動にとって大切なものであり、これを育成することが重要な教育目標であると指摘している⁽³⁾。内発的学習意欲は有能感や自己決定感等に支えられており、ハーターは、有能感を獲得しようとするコンピテンス動機付けの発達モデルの中で、適度に挑戦的な課題に成功することで有能感が高まるとしている。反対に、ある課題に失敗すれば有能感は低下し、さらに外部から与えられる目標に基づいて学習する状態が続くことで外的統制感が強まり、大人に依存した学習態度を子供に形成するとしている⁽³⁾。

一方で、初年度大学簿記教育についての現状は、検定試験である日商簿記3級のすべてを網羅した授業を行うため、多くのことを盛り込み過ぎの傾向があり、簿記教育（特に初級・入門簿記）に多くの負荷をかけているとの意見もある。学生が消化不良のまま単位修得という場合もあり、より実践的で深い理解のためには範囲を絞って反復学習に重点を置く方が望ましい場合もあると言われている⁽⁴⁾。反復学習により有能感を高めることで、内発的学習意欲の喚起につながることも考えられる。

本稿では、簿記教育における内発的学習意欲の育成を目指したカリキュラムについて考察するため、学生の理解度の所感に関するアンケートを実施し、理解が難しく有能感の低下を通して学習意欲の減退につながっていると考えられる分野を特定することで、重点的学習が必要な分野を特定する。また、各分野の理解度の向上が簿記試験の成績向上に与える影響を定量的に評価する。

方法と結果

1. 理解度に関するアンケート調査

2015年度、2016年度初年度簿記教育科目「簿記演習Ⅰ」受講者それぞれ120人、145人を対象に、前期授業が終了した時点で、前期で学習した各分野の理解度についてアンケート調査を実施した。

1.1 調査項目

調査項目は、本校の初年度前期簿記教育の授業内容を参考に作成した（表1）。大領域として、①簿記の基礎、②取引の記帳（仕訳）、③帳簿と伝票、④決算に分けて測定した。さらに、それぞれについて、①は2項目、②は20項目、③は5項目、④については3項目に分けて測定した。

大領域①については、簿記の基礎の理解を評定する。説問1は簿記の5要素に関する知識の理解を尋ねた。企業会計における期間損益計算の方法である財産法と損益法から、それぞれの損益計算の理解を問うものである。設問2は仕訳・転記の基本的仕組みと一連の手続きの流れの理解を見た。

現代の会計システムにおいて通常使用されている複式簿記においては、日々の取引を一定のルールに従って記録・整理することが目的であるが、その記録の第一段階が仕訳である。簿記は「仕訳に始まり、仕訳に終わる」と言われるように、仕訳の意味を知り、その仕訳の仕組みを理解することが簿記理解の根幹を成すところである。基本的な取引の仕訳を習得し、個々の経済取引を仕訳できるかが簿記理解の出発点であるため、大領域②については、仕訳の理解度について多くの項目を測定に加えた。

設問3から設問5は、企業の現金・預金の基本的な取引に関する知識とその記帳方法について理解ができていないかを尋ねるものである。説問3では、小切手の振り出しを支払手段として利用できる貨幣性資産として捉えているか、通貨のほかに通貨代用証券として扱われる小切手の受取に関する仕訳の理解度を見た。説問4では、現金の実際有高と帳簿残高が不一致の場合の処理法を問うた。説問5では、当座預金、短期借入金としての当座借越の意味と処理方法の理解ができていないかを見た。

説問6から説問10は、商品売買の記帳方法の理解を尋ねるものである。説問6は基本的な取引に基づく3分法による商品売買の記帳法の理解を問うた。説問7は商品の返品・値引に関する処理方法、説問8は掛け取引の記帳方法の理解を見た。説問9は売上原価に関する決算整理仕訳に関する理解を問うた。説問10は貸倒れの意味とその処理を問うた。

説問11から説問14は、手形取引の意味とそれに関する記帳方法の理解を尋ねるものである。手形債権・手形債務の関係、手形の裏書譲渡・手形の割引の内容とその記帳法の理解を問うた。

説問15から説問17は、その他の債権・債務についての意味と記帳方法の理解を尋ねるものである。説問15は金額・勘定科目が未確定な場合に一時的に処理する仮払金・仮受金勘定の意味を知り、その記帳法を問うた。説問16は給料に関する立替金・預り金勘定について、説問17は商品注文の際の手付金・内金の処理方法である前払金・前受金勘定についての意味と記帳法を問うた。

説問18から説問20は、株式・社債等の有価証券と備品・建物・土地・車両等の固定資産の購入・売却時の記帳法、固定資産の減価償却の方法と記帳法の理解を調べるものであ

る。説問21・22では、資本金・引出金勘定の意味を問うた。

大領域③については帳簿、特に補助簿の記帳方法と3伝票制についての理解を尋ねた。説問23は定額資金前渡法の意味の理解と小口現金出納帳の記入法、説問24は商品有高帳の補助簿としての役割と先入先出法の記帳法の理解を問うた。説問25は仕入帳・売上帳の補助簿としての役割と記帳法、説問26は仕入先（買掛金）元帳・得意先（売掛金）元帳の記帳法を問うた。説問27は3伝票制の起票方法の理解を問うた。

大領域④については決算整理の意味とその必要性についての理解を尋ねた。説問28は試算表の意味と役割、その種類、作成方法の理解を問うた。説問29では、売上原価の計算、貸倒れの見積もり、固定資産の減価償却、現金過不足の整理、引出金の整理、以上5項目の決算整理事項を含む8桁精算表の作成方法を理解しているかを調べた。説問30は決算の最終手続きとしての貸借対照表、損益計算書の作成方法の理解を問うた。

表 1 理解度の調査項目

〈簿記の基礎領域〉	17 手付金・内金に関する仕訳
1 簿記の5要素の計算問題	18 株式の購入・売却に関する仕訳
2 仕訳・転記	19 備品の購入・売却に関する仕訳
	20 減価償却に関する仕訳
〈取引の記帳(仕訳)領域〉	21 元入れに関する仕訳
3 小切手の受取に関する仕訳	22 引出金の整理に関する仕訳
4 現金過不足に関する仕訳	
5 当座借越に関する仕訳	〈帳簿と伝票領域〉
6 商品売買に関する仕訳	23 小口現金出納帳の記入
7 商品の返品・値引に関する仕訳	24 商品有高帳の問題
8 掛け取引に関する仕訳	25 仕入帳・売上帳の記入
9 売上原価に関する決算整理仕訳	26 仕入先元帳・得意先元帳の記入
10 貸倒れに関する仕訳	27 伝票の問題
11 約束手形に関する仕訳	
12 為替手形に関する仕訳	〈決算領域〉
13 手形の裏書に関する仕訳	28 試算表の問題
14 手形の割引に関する仕訳	29 精算表の問題
15 金額・勘定科目が未確定の場合の仕訳	30 財務諸表(B/S・P/L)の問題
16 給料の支払に関する仕訳	

1.2 評定方法

評定は各設問項目について、「全く理解していない」(1点)、「どちらかと言えば理解していない」(2点)、「どちらかと言えば理解している」(3点)、「理解している」(4点)で評定してもらった。項目ごとに得点(1から4点)を合計して、各項目の理解度得点を算出した。

1.3 結果

設問項目ごとの理解度得点の平均点と、それについて降順に順位付けを行った結果を表2に示した。全体を通して、仕訳・転記に関する設問2と株式の購入・売却に関する仕訳の理解を問う設問18以外は、2015年度と2016年度に大きな差異は認められなかった。

両年度とも給料の支払に関する仕訳、備品の購入・売却に関する仕訳、商品売買に関する仕訳、現金過不足に関する仕訳など、より身近なものとして実体験しやすい分野については理解度の平均が高いことが見てとれた。反対に、手形の裏書譲渡や手形の割引、為替手形に関する仕訳等、馴染みのない手形の取引については理解度の平均が低かった。手付金・内金に関する仕訳、金額勘定科目が未確定の場合の仕訳も同様に理解度が低かった。一方、馴染みがないと考えられる小切手の受取に関する仕訳、当座借越に関する仕訳、精算表の問題については、簿記試験の頻出項目であることから、授業で重点的に扱っており、理解度が高いようである。

表2 理解度得点の項目別比較

	2015年度		2016年度		平均	
	平均	順位	平均	順位	平均	順位
1 簿記の5要素の計算問題	3.09	24	3.15	23	3.12	23
2 仕訳・転記	3.51	9	3.38	17	3.45	14
3 小切手の受取に関する仕訳	3.62	3	3.68	3	3.65	3
4 現金過不足に関する仕訳	3.62	3	3.57	5	3.60	5
5 当座借越に関する仕訳	3.61	5	3.56	6	3.58	6
6 商品売買に関する仕訳	3.61	5	3.60	4	3.60	4
7 商品の返品・値引に関する仕訳	3.05	26	3.14	24	3.09	25
8 掛け取引に関する仕訳	3.58	8	3.55	8	3.56	7
9 売上原価に関する決算整理仕訳	3.24	18	3.35	18	3.29	18
10 貸倒れに関する仕訳	3.46	14	3.46	13	3.46	13
11 約束手形に関する仕訳	3.49	11	3.55	8	3.52	9
12 為替手形に関する仕訳	3.03	27	3.03	27	3.03	27
13 手形の裏書に関する仕訳	2.72	30	2.73	30	2.72	30
14 手形の割引に関する仕訳	3.07	25	2.96	28	3.02	28
15 金額・勘定科目が未確定の場合の仕訳	2.99	28	3.08	26	3.03	26
16 給料の支払に関する仕訳	3.74	1	3.79	1	3.77	1
17 手付金・内金に関する仕訳	2.97	29	2.88	29	2.93	29
18 株式の購入・売却に関する仕訳	3.48	13	3.56	6	3.52	10
19 備品の購入・売却に関する仕訳	3.70	2	3.78	2	3.74	2
20 減価償却に関する仕訳	3.34	17	3.40	16	3.37	17
21 元入れに関する仕訳	3.45	15	3.51	11	3.48	12
22 引出金の整理に関する仕訳	3.49	12	3.40	15	3.45	15
23 小口現金出納帳の記入	3.11	22	3.24	20	3.17	21
24 商品有高帳の問題	3.51	9	3.47	12	3.49	11
25 仕入帳・売上帳の記入	3.38	16	3.43	14	3.40	16
26 仕入先元帳・得意先元帳の記入	3.12	21	3.18	22	3.15	22
27 伝票の問題	3.15	20	3.30	19	3.22	19
28 試算表の問題	3.19	19	3.19	21	3.19	20
29 精算表の問題	3.59	7	3.53	10	3.56	8
30 財務諸表(B/S・P/L)の問題	3.11	22	3.11	25	3.11	24

2. 分野ごとの学習理解度と簿記試験成績について

本検証では、各分野の理解度の向上が簿記試験の成績向上に与える影響を定量的に評価するため、簿記学習の理解度得点を説明変数に、全経簿記検定3級、日商簿記検定3級、全経簿記検定2級の点数データを偏差値化したものをそれぞれ目的変数とし、回帰分析

を行った。

簿記学習の理解度データは、2015年度「簿記演習Ⅰ」受講者120人分の理解度アンケートデータと2016年度「簿記演習Ⅰ」受講者145人分の理解度アンケートデータを用いた。また、簿記検定試験の成績データは、2015年度の全経簿記検定3級（2015.7.12実施）、日商簿記検定3級（2015.11.15実施）、全経簿記検定2級（2016.2.21実施）の受験者計120人分の点数データを偏差値化したものと、2016年度の全経簿記検定3級（2016.7.10実施）、日商簿記検定3級（2016.11.20実施）、全経簿記検定2級（2017.2.19実施）の受験者計145人分の点数データを偏差値化したものを用いた（ただし、一部欠損あり）。

2.1 理解度と全経簿記検定3級との相関

アンケートの各設問項目の理解度得点を説明変数、全経簿記検定3級の点数データを偏差値化したものを目的変数とする回帰分析を行った（式1）。回帰係数の有意性について、有意水準を10%と仮定して検定を行った。分析の結果、理解度得点を説明変数とした場合の回帰係数（傾き）の推定値が4以上有意に上昇する項目として以下のものが挙げられた。

2015年度では、小切手の受取に関する仕訳（6.73）、給料の支払に関する仕訳（6.085）、備品の購入・売却に関する仕訳（6.067）、約束手形に関する仕訳（5.741）、株式の購入・売却に関する仕訳（5.453）、掛け取引に関する仕訳（5.373）、商品売買に関する仕訳（5.211）、仕訳・転記（5.184）、現金過不足に関する仕訳（4.892）、簿記の5要素の計算問題（4.807）、仕入帳・売上帳の記入（4.764）、商品有高帳の問題（4.71）、財務諸表（B/S・P/L）の問題（4.702）、精算表の問題（4.606）、試算表の問題（4.496）、売上原価に関する決算整理仕訳（4.36）、引出金の整理に関する仕訳（4.352）、貸倒れに関する仕訳（4.312）の18項目が挙げられた。

2016年では、精算表の問題（6.668）、小切手の受取に関する仕訳（5.2）、商品有高帳の問題（4.137）、減価償却に関する仕訳（4.136）、引出金の整理に関する仕訳（4.128）、現金過不足に関する仕訳（4.118）、当座借越に関する仕訳（4.07）、掛け取引に関する仕訳（4.002）の8項目であった。両年度の共通項目として、「精算表の問題」、「掛け取引に関する仕訳」、「現金過不足に関する仕訳」、「商品有高帳の問題」、「引出金の整理に関する仕訳」が挙げられ、それらの項目に関しては簿記検定試験の点数と理解度得点との間に関連があることが認められた（表3）。

式1 単回帰分析のモデル式*（全経簿記検定3級）

$$\text{全経簿記検定3級偏差値} = \beta 1 \times \text{理解度得点} + \beta 0$$

*誤差項は省略

表3 回帰係数の有意性の検定結果（全経簿記検定3級）

	2015年度			2016年度		
	推定値	P値	有意水準	推定値	P値	有意水準
1 簿記の5要素の計算問題	4.807	2.1E-05 ***		0.5322	0.67	
2 仕訳・転記	5.184	0.00019 ***		2.015	0.105	
3 小切手の受取に関する仕訳	6.73	1.1E-05 ***		5.2	0.00505 **	
4 現金過不足に関する仕訳	4.892	0.00234 **		4.118	0.0105 *	
5 当座借越に関する仕訳	3.858	0.0139 *		4.07	0.00426 **	
6 商品売買に関する仕訳	5.211	0.00056 ***		2.071	0.163	
7 商品の返品・値引に関する仕訳	1.589	0.189		2.753	0.0363 *	
8 掛け取引に関する仕訳	5.373	0.00033 ***		4.002	0.00862 **	
9 売上原価に関する決算整理仕訳	4.36	0.00113 **		2.769	0.0289 *	
10 貸倒れに関する仕訳	4.312	0.0009 ***		3.101	0.024 *	
11 約束手形に関する仕訳	5.741	3.5E-05 ***		3.421	0.0253 *	
12 為替手形に関する仕訳	1.954	0.122		1.855	0.0933	
13 手形の裏書に関する仕訳	1.467	0.202		-0.114	0.912	
14 手形の割引に関する仕訳	1.893	0.105		1.041	0.328	
15 金額・勘定科目が未確定の場合の仕訳	1.767	0.118		1.591	0.142	
16 給料の支払に関する仕訳	6.085	0.00015 ***		-0.244	0.906	
17 手付金・内金に関する仕訳	3.105	0.0147 *		1.725	0.156	
18 株式の購入・売却に関する仕訳	5.453	8.3E-05 ***		3.56	0.0128 *	
19 備品の購入・売却に関する仕訳	6.067	9.7E-05 ***		-0.614	0.762	
20 減価償却に関する仕訳	3.362	0.00638 **		4.136	0.00182 **	
21 元入れに関する仕訳	2.535	0.0437 *		3.058	0.0207 *	
22 引出金の整理に関する仕訳	4.352	0.00301 **		4.128	0.00068 ***	
23 小口現金出納帳の記入	2.983	0.018 *		2.913	0.016 *	
24 商品有高帳の問題	4.71	0.00026 ***		4.137	0.00161 **	
25 仕入帳・売上帳の記入	4.764	0.00012 ***		2.977	0.0346 *	
26 仕入先元帳・得意先元帳の記入	2.771	0.0184 *		2.836	0.0217 *	
27 伝票の問題	3.887	0.00276 **		3.814	0.00178 **	
28 試算表の問題	4.496	9.8E-05 ***		1.685	0.185	
29 精算表の問題	4.606	0.00052 ***		6.668	2.3E-06 ***	
30 財務諸表(B/S・P/L)の問題	4.702	6.3E-05 ***		2.271	0.0496 *	
理解度合計得点	0.2734	1E-05 ***		0.1984	0.00256 **	

0 **** 0.001 *** 0.01 * 0.05 ' 0.1 ' ' 1

2.2 理解度と日商簿記検定3級との相関

アンケートの各設問項目の理解度得点を説明変数、日商簿記検定3級の点数データを偏差値化したものを目的変数とする回帰分析を行った（式2）。回帰係数の有意性について、有意水準を10%と仮定して検定を行った。分析の結果、理解度得点を説明変数とした場合の回帰係数（傾き）の推定値が4以上有意に上昇する項目として以下のものが挙げられた。

2015年度では、商品売買に関する仕訳（6.184）、当座借越に関する仕訳（5.215）、貸倒れに関する仕訳（4.877）、小切手の受取に関する仕訳（4.591）仕入帳・売上帳の記入（4.391）、約束手形に関する仕訳（4.224）、株式の購入・売却に関する仕訳（4.183）の7項目が挙げられた。

2016年度については、当座借越に関する仕訳（5.853）、商品売買に関する仕訳（5.381）の2項目が挙げられた。共通項目として「商品売買に関する仕訳」、「当座借越に関する仕

訳」が挙げられ、それらの項目に関しては簿記検定試験の点数と理解度得点との間に関連があることが認められた（表4）。

式2 単回帰分析のモデル式*（日商簿記検定3級）

$$\text{日商簿記検定3級偏差値} = \beta 1 \times \text{理解度得点} + \beta 0$$

*誤差項は省略

表4 回帰係数の有意性の検定結果（日商簿記検定3級）

	2015年度			2016年度		
	推定値	P値	有意水準	推定値	P値	有意水準
1 簿記の5要素の計算問題	3.24	0.0159 *		-1.092	0.438	
2 仕訳・転記	3.953	0.0158 *		0.5859	0.695	
3 小切手の受取に関する仕訳	4.591	0.0127 *		3.948	0.0826 .	
4 現金過不足に関する仕訳	2.907	0.105		2.621	0.172	
5 当座借越に関する仕訳	5.215	0.00584 **		5.853	0.00056 ***	
6 商品売買に関する仕訳	6.184	0.00038 ***		5.381	0.00352 **	
7 商品の返品・値引に関する仕訳	2.62	0.0641 .		2.002	0.239	
8 掛け取引に関する仕訳	3.193	0.0695 .		3.557	0.0495 *	
9 売上原価に関する決算整理仕訳	1.797	0.261		1.073	0.477	
10 貸倒れに関する仕訳	4.877	0.00262 **		3.579	0.0335 *	
11 約束手形に関する仕訳	4.224	0.00743 **		3.649	0.0548 .	
12 為替手形に関する仕訳	-0.244	0.876		-0.026	0.985	
13 手形の裏書に関する仕訳	0.1007	0.939		-1.701	0.178	
14 手形の割引に関する仕訳	3.696	0.00409 **		0.7364	0.559	
15 金額・勘定科目が未確定の場合の仕訳	0.1678	0.899		0.2481	0.855	
16 給料の支払に関する仕訳	2.777	0.142		2.475	0.295	
17 手付金・内金に関する仕訳	2.234	0.131		0.7092	0.622	
18 株式の購入・売却に関する仕訳	4.183	0.0103 *		3.842	0.0192 *	
19 備品の購入・売却に関する仕訳	3.943	0.0282 *		3.807	0.10011	
20 減価償却に関する仕訳	0.9034	0.55		2.752	0.0784 .	
21 元入れに関する仕訳	0.4934	0.733		2.814	0.051 .	
22 引出金の整理に関する仕訳	3.294	0.0518 .		2.384	0.102	
23 小口現金出納帳の記入	1.717	0.215		2.159	0.152	
24 商品有高帳の問題	3.541	0.0199 *		-0.061	0.971	
25 仕入帳・売上帳の記入	4.391	0.00238 **		3.406	0.037 *	
26 仕入先元帳・得意先元帳の記入	2.579	0.0637 .		2.309	0.104	
27 伝票の問題	3.816	0.0139 *		1.73	0.264	
28 試算表の問題	3.123	0.0221 *		0.8571	0.555	
29 精算表の問題	2.179	0.159		0.6087	0.741	
30 財務諸表(B/S・P/L)の問題	3.634	0.016 *		1.674	0.218	
理解度合計得点	0.2179	0.00468 **		0.1248	0.108	

0 **** 0.001 *** 0.01 ** 0.05 * 0.1 . 1

2.3 理解度と全経簿記検定2級との相関

アンケートの各設問項目の理解度得点を説明変数、全経簿記検定2級の点数データを偏差値化したものを目的変数とする回帰分析を行った（式3）。回帰係数の有意性について、有意水準を10%と仮定して検定を行った。分析の結果、2015年度では、理解度得点を説明変数とした場合の回帰係数（傾き）の推定値が3以上の有意に上昇する項目として

簿記教育における内発的学習意欲の育成を目指したカリキュラムについての考察

以下のものが挙げられた。仕入帳・売上帳の記入 (3.854)、商品有高帳の問題 (3.727)、当座借越に関する仕訳 (3.589)、財務諸表 (B/S・P/L) の問題 (3.465)、簿記の5要素の計算問題 (3.462)、試算表の問題 (3.379)、仕訳・転記 (3.342) があった。

2016年度については、推定値が4以上の有意に上昇する項目として次のものが挙げられた。掛け取引に関する仕訳 (5.974)、元入れに関する仕訳 (5.872)、精算表の問題 (5.24)、減価償却に関する仕訳 (4.959)、備品の購入・売却に関する仕訳 (4.379)、小口現金出納帳の記入 (4.355)、給料の支払に関する仕訳 (4.295) の7項目があった(表5)。

式3 単回帰分析のモデル式* (全経簿記検定2級)

$$\begin{array}{l} \text{全経簿記検定2級} \\ \text{偏差値} \end{array} = \beta 1 \times \text{理解度得点} + \beta 0$$

*誤差項は省略

表5 回帰係数の有意性の検定結果 (全経簿記検定2級)

	2015年度			2016年度		
	推定値	P値	有意水準	推定値	P値	有意水準
1 簿記の5要素の計算問題	3.462	0.0121 *		-0.815	0.617	
2 仕訳・転記	3.342	0.0467 *		3.487	0.0392 *	
3 小切手の受取に関する仕訳	1.055	0.579		3.944	0.12268	
4 現金過不足に関する仕訳	2.201	0.23		2.058	0.36	
5 当座借越に関する仕訳	3.589	0.0652		3.479	0.113	
6 商品売買に関する仕訳	2.186	0.23		1.734	0.423	
7 商品の返品・値引に関する仕訳	0.4295	0.778		0.46	0.813	
8 掛け取引に関する仕訳	0.3831	0.828		5.974	0.00422 **	
9 売上原価に関する決算整理仕訳	1.341	0.423		2.082	0.238	
10 貸倒れに関する仕訳	1.637	0.309		3.385	0.0927	
11 約束手形に関する仕訳	1.382	0.416		3.387	0.151	
12 為替手形に関する仕訳	0.2992	0.85		0.856	0.607	
13 手形の裏書に関する仕訳	-0.083	0.953		-0.552	0.692	
14 手形の割引に関する仕訳	1.339	0.333		0.8258	0.584	
15 金額・勘定科目が未確定の場合の仕訳	0.466	0.729		1.032	0.518	
16 給料の支払に関する仕訳	-0.195	0.918		4.295	0.09866	
17 手付金・内金に関する仕訳	0.6929	0.651		-1.306	0.453	
18 株式の購入・売却に関する仕訳	1.294	0.434		2.731	0.184	
19 備品の購入・売却に関する仕訳	0.4601	0.801		4.379	0.0862	
20 減価償却に関する仕訳	-0.365	0.811		4.959	0.00528 **	
21 元入れに関する仕訳	-0.447	0.762		5.872	0.00024 ***	
22 引出金の整理に関する仕訳	1.487	0.381		2.976	0.0995	
23 小口現金出納帳の記入	2.237	0.124		4.355	0.0115 *	
24 商品有高帳の問題	3.727	0.0229 *		2.284	0.221	
25 仕入帳・売上帳の記入	3.854	0.0108 *		3.314	0.097	
26 仕入先元帳・得意先元帳の記入	2.427	0.0915		2.533	0.149	
27 伝票の問題	1.486	0.368		3.272	0.0695	
28 試算表の問題	3.379	0.0165 *		0.1199	0.94	
29 精算表の問題	-0.21	0.895		5.24	0.01803 *	
30 財務諸表(B/S・P/L)の問題	3.465	0.0242 *		2.535	0.0915	
理解度合計得点	0.1069	0.173		0.1902	0.0477 *	

0 **** 0.001 *** 0.01 ** 0.05 * 0.1 ' ' 1

考察

初年度大学簿記教育についての現状は、検定試験の内容をすべて網羅した授業を行うためカリキュラムの分量が多く、簿記に関する深い理解がないままに、仕訳作業、試算表・財務諸表等の作成作業を繰り返しており、本質的な認識不足によって、より高次のレベルの理解ができにくいと考えられている⁽⁴⁾。

より実践的で深い理解のためには、簿記の記帳手続きの全体像を理解した上で、勘定科目の範囲を絞って反復学習に重点を置く方が望ましいと考えられることから、本稿ではまず、学生の理解度の所感に関するアンケートを実施し、理解の難しい分野を特定した。

その結果、給与の支払や商品売買に関する仕訳等、身近なものとして実体験しやすい分野では理解度が高く、手形や手付金等の馴染みのない分野では理解度が低かった。

心理学では、私たちが何かを理解する際には常に行間を補っており、行間を補うために使う常識的な知識である「スキーマ」がないと理解ができず、記憶も学習もできないことが知られている。スキーマによって情報を意味付けし、必要な情報にのみ注意を向けさせ、記憶することができる⁽⁵⁾。簿記の学習においても、各種取引に関するスキーマの有無が理解度の差異につながっていると考えられる。理解度の高かった給与や商品売買等の取引については、実生活の中ですでにスキーマが形成されており、興味・関心が高い。反対に、馴染みのない分野では、スキーマが欠如しているため、スキーマを形成することなく網羅的に学習することは理解の進展につながらないと考えられる。一方で、小切手の受取などスキーマが欠如している分野であっても、授業で重点的に扱うことでスキーマを一定程度形成し、理解度が向上したと考えられる。このことから、馴染みのない分野の反復学習に重点を置いた授業内容とすることも検討の価値があるように考えられる。

次に、各分野の理解度の向上が簿記試験の成績向上に与える影響を定量的に評価するため、分野ごとの学習理解度と簿記試験成績について回帰分析を実施した。その結果、全経簿記検定3級では、「精算表の問題」、「掛け取引に関する仕訳」、「現金過不足に関する仕訳」、「商品有高帳の問題」、「引出金の整理に関する仕訳」の理解度を、日商簿記検定3級では、「商品売買に関する仕訳」、「当座借越に関する仕訳」の理解度を説明変数とした場合に、いずれの年度でも、回帰係数（傾き）の推定値が有意に上昇しており、これらの分野を理解することで、成績が大きく向上することが示唆された。また、単年度の結果ではあるが、2016年度の全経簿記検定3級では、「簿記の5要素の計算問題」（理解度の順位（以下同様）：23位）、「財務諸表（B/S・P/L）の問題」（24位）、「試算表の問題」（20位）等の理解度が低い分野を理解することで、成績向上への寄与が大きいことが示唆された。

これらのことから、馴染みがなく理解度の低い分野の中でも、特にこれら3分野を優先して重点的に学習することで、試験成績の向上が期待できると考えられる。

全経簿記検定2級については、検定時期が理解度に関するアンケートの実施時期から時間が経っていたことから、理解度と試験成績との関係性が弱く、回帰係数の推定値が比

較的小さくなったものと考えられる。

また、ハーターのコンピテンス動機付けの発達モデルによれば、理解度が向上することで、有能感が増し、内発的学習意欲が喚起される⁽³⁾。実際に、理解度調査と同時に行ったアンケート調査結果では、学習意欲が最初はそれほど高くなかったが、途中から意欲的に簿記学習に取り組むことができた要因として、仕訳の根本的なルールなど簿記に対する基本的な理解ができたからとの回答が一番多かった。このことから学習意欲に与える影響として理解度が大きな要因となっている。

以上のことから、簿記教育のカリキュラムとして、記帳手続きの全体像を学習した上で、馴染みが薄く、理解度は低いが、試験成績への寄与が大きい財務諸表や試算表等の分野を重点的に学習し理解を促すことで、成功体験として内発的学習意欲の向上にもつながることが示唆された。これにより、学生自身の簿記に対する知識状態やそれについての考え方を深掘りする力、自主的に考える力、さらには批判的思考力を身につけることをねらいとしたい。

参考文献・資料

- (1) 「新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて～生涯学び続け、主体的に考える力を育成する大学へ～」(答申)(2012.08.28.)
http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/1325047.htm
- (2) 楠見孝・子安増生・道田泰司 批判的思考力を育む—学士力と社会人基礎力の基盤形成、有斐閣、2012年
- (3) 桜井茂男 学習意欲の心理学—自ら学ぶ子どもを育てる、誠信書房、2014年、pp15-45、95-109
- (4) 桑原正行 大学簿記教育初年度における現状と教育的課題—駒澤大学における1年次簿記教育の現状をふまえて(最終報告)—、2015年
- (5) 今井むつみ 学びとは何か—〈探究人〉になるために、岩波新書、2016年

